瓜生氏

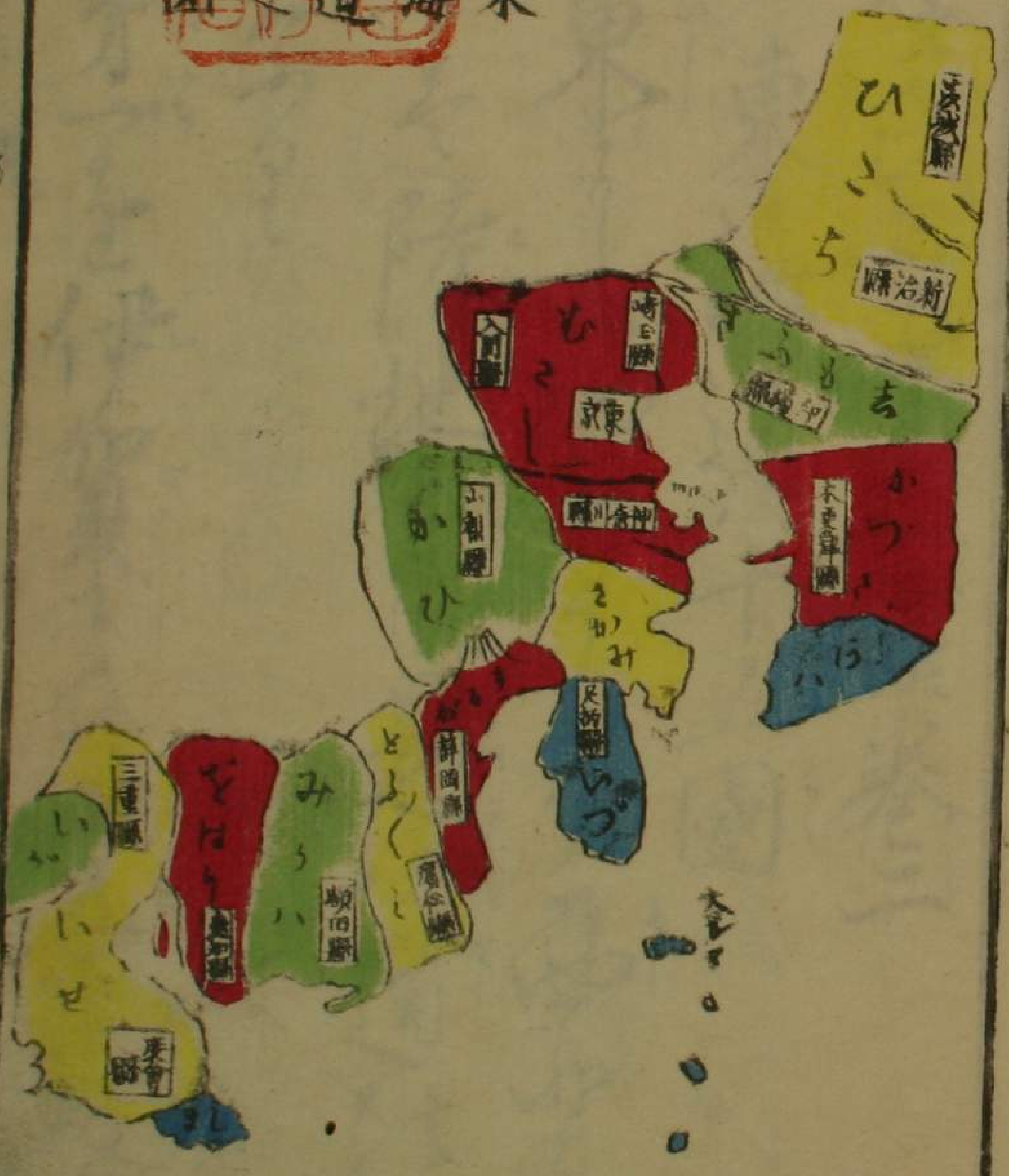
日本國畫

東海道

二

ル 3
3604
2

東海道之図



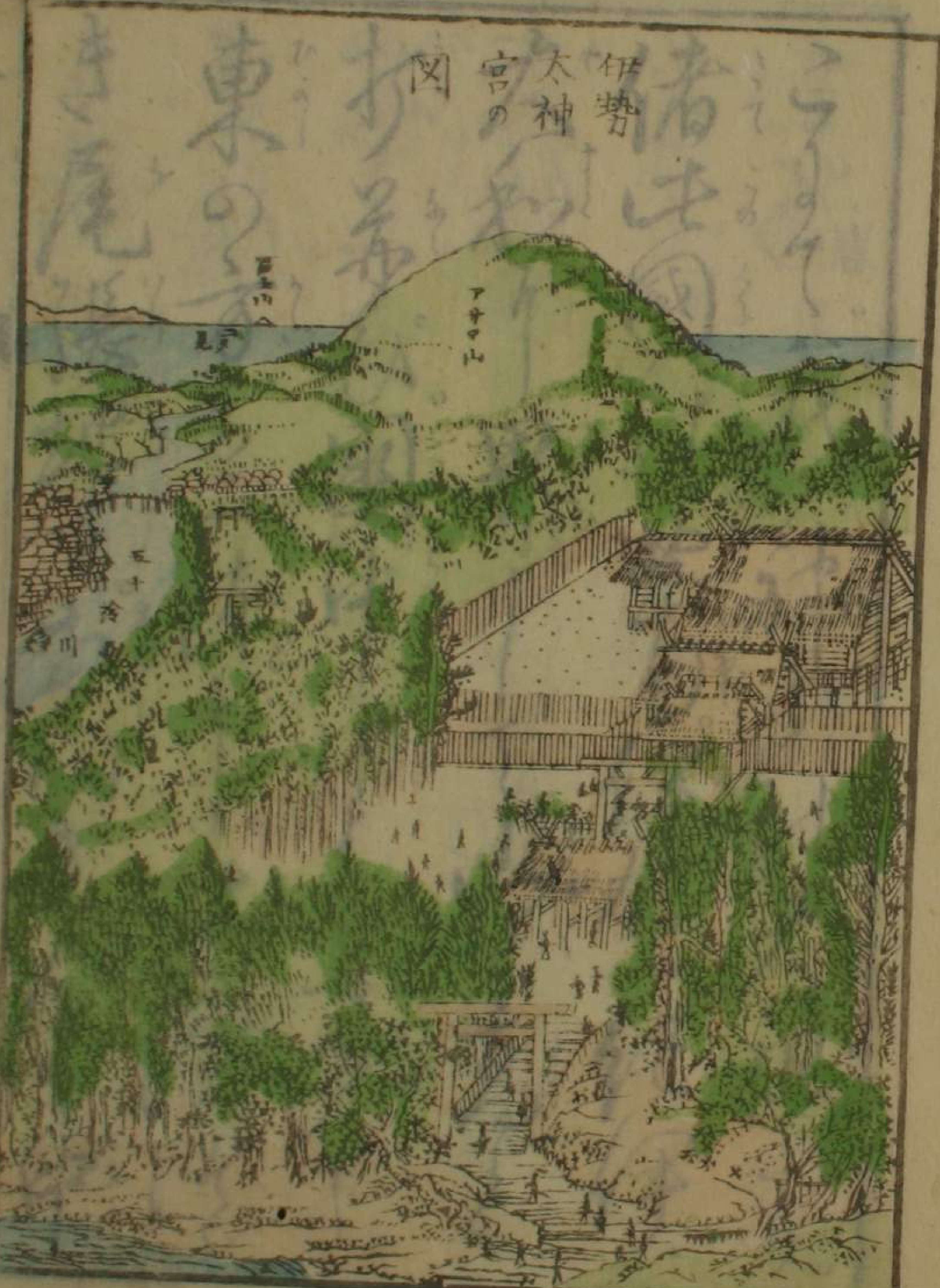
37 7462

瓜生氏日本國盡巻二

東海道ハ十五國
南東は海をうけ。西や
北ハ陸地にて。是八道の
魁なり。
其第一を伊賀といふ。五畿の

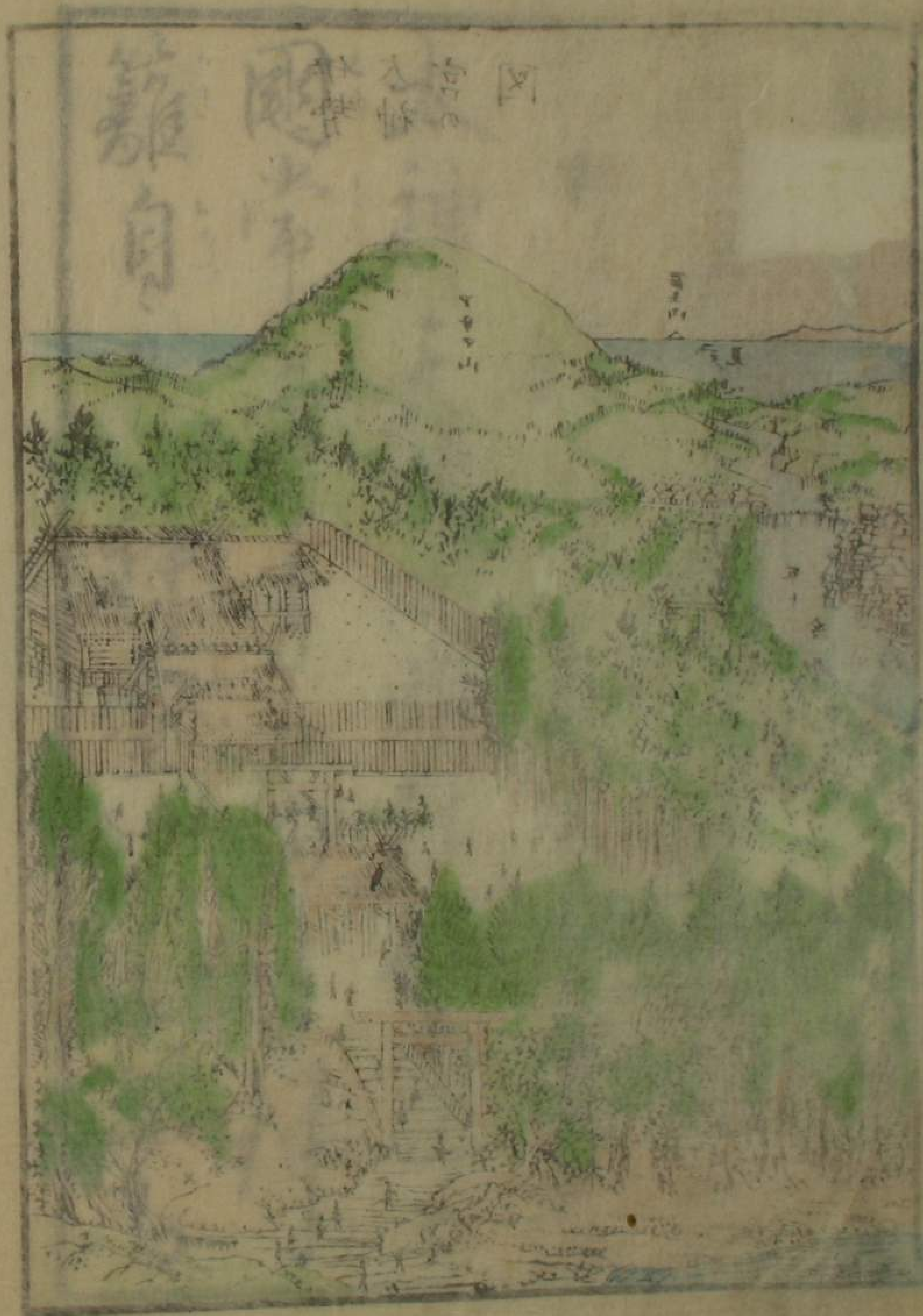
東の山國なく海なし國は
挟れ四つ。畿西の和泉は帯
對し二つの耳のごとくなるは。
四方山多く川多く。人口繁華
万人。気候は程好く安穏
よし。民軽俗を風として。

隣は伊勢平洋へなまむか
しゝ地よきところなり。
第二の伊勢は垂仁の帝は
来
天照太神の宮所五十鈴は
川の水より。立もまもらく



長閑なる。朝日の昇る君が
代の光り輝く源にして内宮
の御神ハ天照。外宮にて豊受
太神。天地開闢の祖なる
國常立尊なり。内外の輝
籬自のら。神霊いちしるき

こゝにて我が神の太祖より。伊勢國ハ西ハ伊賀紀伊。大和に界して山高く打並び。國中川ハ京多し。東の方ハ一体なり。海濱にそひき尾張地と相向き合て中



ある海。名けて伊勢の海といふ。
其海に入りこみて桑名と
いへる一市街あり。東海道
一宿驛なり。尾張の熱田へ通ふ
なり。海上七里を渡しなり
里。海を沿ひて路三里南に

方の四日市。三重の縣の廳あ
り。伊賀一國と當國の郡
八ツを支配せり。其又南宮崎
高き山田の市中より度
會縣の廳を置き當國
五郡志摩一國。紀伊の一郡

を管轄し。彼れは琉球をもこの内なるを。一國中には人口凡そ四十七万六千余。氣候は暖寒氣程よくして。山海平均地味厚く。温和なれは土地の外風俗は伊勢の國よりも稼ぎ

ど。風俗一体欲ふかゝらず（ふ金の色をも見ん世言は侍き素朴らしく。内心細りがごとくまして心まゝたなまきとゝ而あまつ。されど学べば自ら開化して進み智も益し篤き

風らうんし至るべし擧て名所
は朝熊山万金丹の名所なり。
里。伊賀伊勢近江の界なり。
まで。鈴鹿の山や八十瀬川。
関も戸ざゝぬ浪風も立ぬ
二見の浦千鳥。ちるなる似

しつる飛鳥や。其原阿漕か浦。
又名物の中には蛤。鰒。和布。
海蘿。海老。白魚と以銀より。
津には木綿や伊勢暦。
第三志摩は勢州より。辰
巳に張出し岬まで。二流

の伊良子か崎に對し。伊勢
乃入江の門をさかひて。其つゞき
へて今よりまし。廣く海中
指出しを以の須り也。累
浪よりて岸お前まて土落
大方も諸海とさする。今

崗はなる島かくれし。元ハ本地
の地にてありしか。今ハ離地
なりしと。其後ハ。伊勢の國より
さきの島にて。志摩の國に
地つゞき入たりしとや。其國
至て小國なり。海藻多く

土地あしく人口三万七千余
気候風俗おしなべて伊
勢とことなる事なしといふ
し。殊に名高き鳥羽浦
は東海船の碇泊場。こゝを
出れば七十五里。伊豆の下

田の港まで山影見えぬ遠
州洋は音に聞く荒海なれば。
風待すべき港なしよりて
船客十分の追手の風を得
るまでは。みな此浦に
帆をおろし。旅の労をや

さても我か。其産物をとききく海苔。鯔ふぐたひ生珠貝西の尾張を伊勢の海にわけ。和東手の岸干して。北は山々おち合ひ。南は海濱おほくきき。南北長く東西は。狭く

短く瓢箪を。横に臥せたる形象。其瓢箪の底は北方北より木曽川繞りて出る。西に向ひて海に入る。其川美濃と尾張地の界にあるまで一名を。尾越川とも申すなり。

葉栗中島の一郡愛知
名古屋といへる市街は三都
に次ぐ賑ひにて軒を
並べし商人富豪の家
のいと多し内にも愛知乃
縣廳あり當國七郡を統轄
し。扨又知多の一郡は海
へ突出し岬にて隣國
三河の額田なり。其縣廳
の支配なり。八郡總ての
人口は。六十万と聞えたり。五
千七百あまりなるべく氣候

暖気有り土地肥えて人は
富貴も兼ね備の。ならはき
風ぞく。昔より秀でし人は
いと多し。其産物は綿
蕪玉。鳴海絞り瀬戸
磁器。

第五参河は矢矧川大平川
と豊川の三つは大河ある
故に参河の國と唱へ
東南は海濱北は山。辺の
境界も広くして平原
曠野いと打広く南の海へ

指出る。渥美といへる一郡
あり。尾張は知多郡と並び
二本の角に似たるごとく。
其端志摩と相對し。伊
勢の海は入口狭く。伊良古
といへる岬あり。備中國は

一圓に土質一躰あしくして。
五穀の熟も能く稔り
暑温和にして風俗も質實多
くして恥を知る。人口四十二
万余。額田の郡岡崎あり。額
田郡の廳あり。參河の

中に尾張なる知多一郡
を管轄して名倉の砥石吉
良雲母芋川温飩足代紙
是皆参河の名物也
東は番て遠江北は高峰
おひ重なる秋葉白山嶽・[illegible]

春日大日白光山中を流るる
天龍の川は隣國信濃なる
諏訪の湖より出て全國中
を蔓延りて東の方は大井川
海道一路大河にて駿河の
國との界なり南の方は

頃海を塩見坂より眺むれば。
沖は即ち遠州洋。太平
海の内にして。天水を連ね
一点の眼を遮る物もなし。
風土は参河とかはらねど
北は山中なるや、寒し。土質

厚くよく熟せり。一國中の
人口は。三十四万二千余。人気
つよく智もあまりくち少し
性急のところあり。是一の疵
濱名はもとく明應八年地震
まゝく。大山くづれて入海と

なるは寝覚たる今切の渡
井伊谷して天竜の川は浜松城
市街はいまは掛川城
支配なり。当国土産の概略は
紫根茜根葛の布。蜜柑
柑子や彩坂。其名あり

なるは蕨餅
七より駿河も南海。伊豆
一国と相対し。中まで入海
三保の浦。遥あなたを眺
まずは。右は左は遠州と
豆州の山に立並ぶ広

寺浦頭の其中より清見が
関や田子の浦。あまが羽衣
いつまでもし。あかぬ絶景を
三保の松。枝ねまは直度も忘るる
らん。小やそ一面に山つゞき三国一
の富士乃山。其高さは海

面より直立一千四百丈。絶
頂は白妙に。四時白雪を
載き。麓は駿河の甲斐
相模。三ヶ國に跨りて。
其餘に高山あれども
しあふぐ如く山の上より

見よ蟻が為せる土塊よりもなほ小し。其器や擂盆を。倒りし伏せするごとく。四方八面いづこより。望むも同じ山の王。是ぞ火山の一にして今より二千百五十八年

ひのもとのやまのはじめは昔孝霊天
皇の御宇とかや一夜に湧
出し山なりと。いにしへよりの
言伝る。あまたの不思議の事
ゆへなり。縁ぜせぬ人もある
べけれど。世界まで広し

こゝも我是れ地中より温泉
涌出す。依て作業古来注き
あまたあり。近くは小の
亜墨利加あり。ジヨルロの峯
の出来しなり。備中國は
川々多し。一つは冨士川矢の如く

二つ有。安倍川の流有。静岡
縣の廰あり。駿河一國を
管轄し。町々殊に繁昌
なり。此一國は人口凡二十五万
三千余。地形東西に
長く。山を脊負ひ海を抱

き河を帯びたる國なれ
ば。寒暑中正温暖にして地味
一旅に厚けれども。人の氣柔弱
遠慮とゝのほらず。氣狭
くして實すくなき。所作多し
なりき風とかや。其産物乃

呂とも駿河の津紙なり紬
工。杉原富士菅沖津鯛。
第八甲斐なる山中の偏地なれ
ども一都會。海なし。まはり
持ちぬ五つ。高き富士山を
霞ひ。株廉千流るゝ冨士川

は上流支流國内に縦横
通じて西の方地蔵鳳凰
駒嶽白嶺の山脈七面山身
延山あり引連なり向ふは
金峰山板垣山より天目山
高山多き其中に甲府と

いへる都會あり繁昌なり
たる山梨は縣の支配にて甲
斐一國を一圓に人口二十
九万七千余。氣候不正なり
陽氣少く。只草木のみ
生茂り。人氣も餘り悪しく

不道理なること多しとて
いふし（武田ハ晴信も従ひ）
しこともありと聞く其
産物ハ蠟漆紙や郡内紬
葡萄と小梅あり姫胡桃
東海道の第九番伊豆なる

駿河と相模との間より出たる
岬なり三方ハみな海岸
みな北ハ箱根の険を負
ひ相模の國とハ國界。中に
天城の山あり。属島多く
七島の名ハ青ヶ島八丈嶋

ゝ海にも漁利も多く。府に温泉湧き出て。府中に清き名湯の相模につゞきし海岸あり。熱海の湯の名も高く悪疾難病ある人も遠き道をも厭はずしてみなきたりつどふ。

集ひて湯あみをなせりとかや。南にさし出し其端に下田の湊繁昌し。城崎を立て置きたる海上遠く輝らし渡し往来の船の宿る月。光を仰ぐのみなれども七多し。

國中一圓十二万五千五百の人口にて。畠多くして田少なく四時の気候ハ暖なり。民俗ハ強中の強ハして。偏境故か何事にも。第一は気質なり。尤も勇くありて至りてハ。

其風俗も一ならずで。其髪輪ある一圓なり。隣國相模の足柄殊に諸國産なる絶。八丈紬紙も行。十小相模の南なる。相模洋とく遠州の洋よりつゞきて。

浪高く。其海中へさし出たる。岬ハ安房と相對し。武蔵の海の袋口にて。夜も燈明臺ありて。渡海の船の便とす。西ハ小足柄山。大山津久井丹澤山。其奥山より

流出る。水ハ酒匂と甲州より。流れて来る馬入といふ。二つの川ハ海へ出づ。馬入の東の三郡まで。隣國神奈川縣支配にて。七里が濱や。江の嶋や。名勝多き相模

中なり。鎌倉は[illegible]
へし源朝臣頼朝の。創業あ
りし古覇の跡昔ゆかし
起處多くあり。又横須賀に
港ありて。造船寮を建置て。
蒸気軍艦商船を新に
造らせたまふ。西の箱根
は山上にて伊豆と相模の
國界音に聞えし天険の
上下八里は大峠其頂上の
湖水ありて冨士の高根を
影とうつして。眺望無双の景色

まて其外七所の温泉あり。
湯治の客の絶る事なし。箱
根の麓小田原より足柄縣の
廳あまりて馬入以西の六郡
と伊豆一國を管轄して一國
九郡の人口凡二十七万八千余

山多し。空氣おほくして。
海手ハ寒暑の候平かなり人気
ハ豆州に似たれども。世事
につまりて時勢に随て轉變し
易き所あり。其産物ハ
海雀。梅干。大根。鎌倉海老。

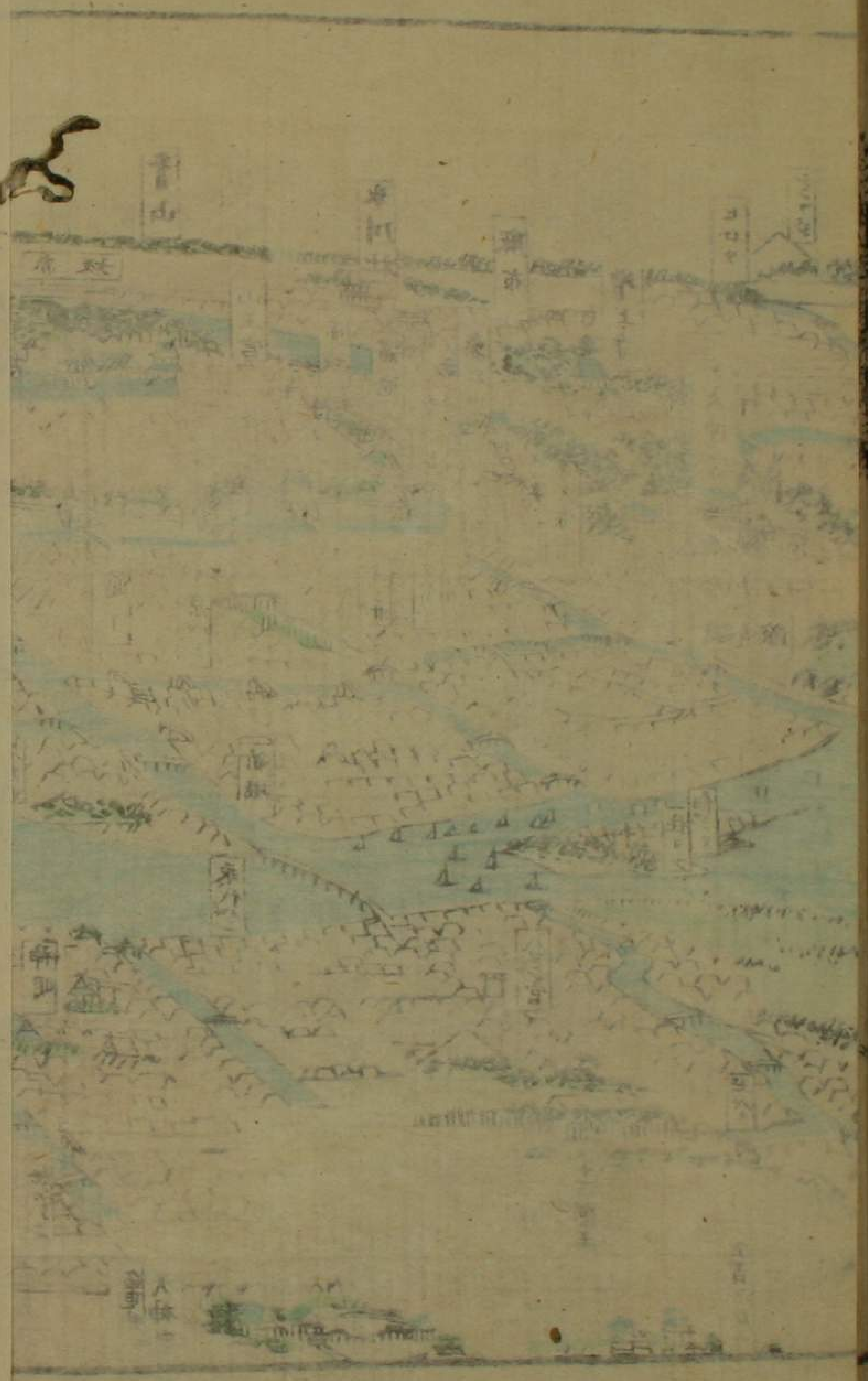
第十一ハ武蔵にて平原に
廣くはてしなく空と一つに
草の原。草より出て後ハ
又草に入る月影と詠しも
今ハ一面の菜金に一のふ流
土一面あり黄金の花ぞ咲く

皇居
青山
四ツ谷
赤坂
麻布
氷川社
増上寺
山王宮
愛宕山
溜池
赤坂
幸バシ
久保町
牛込
市ケ谷
八マン宮
神田
日本橋
江戸バシ
一石バシ
トキハバシ
京バシ
通丁
小川丁
カンダバシ
神田
神田
神田
柳原
両国
新堀
永代バシ
大ハシ
両国バシ
八マン宮
神明
回向院
中ノ郷
小梅
天神宮
三十三間堂

東京之圖

皇居
赤坂
青山
四ツ谷
目黒
ヒロヲ
麻布
増上寺
山王宮
愛宕山
溜池
芝大神宮
日本橋
京バシ
新橋
トキハバシ
神田
柳原
両国
大ハシ
両国バシ
上の
本郷
小石川
高田
目白
牛込
下谷
吉原
観音
八マン宮
神明
五百ラカン
天神宮

東京府とて四里四方世界類なき大都會。其人口を百万余。數千の大厦棟を似。億万の高戸星のごとく。碧瓦白壁立並び。錐を立つべき土地もなし。其



町々の繁栄は人の往来の
肩を摩れ馬車人力の音
絶えまぞ連る袂は幕をなす
ごとく揮ふ汗は雨を
なし商賣日ごとに盛に
て百貨普く輻輳して殊に

戊辰年の王政一新以来は
萬機の出づる所なる官省
寮司吏らの甍を連ね
山巍々と堂々中にたなびく
白雲は九重にたつ禁
城を空に聳えていや

直く。天津日嗣はいやますて
し。位しまします宮所は内裏
の長城不夜の城。昇平極
楽世界とよぶ。此都をや
いふなるらん。まして近来は
国家。交易盛に打つゞき

兼て又人々も居を占く。共に京
王化より洛中に於て甚大
学小学の設けも日々に数
加ほく。勧学の道はたゞ皇
よく。男女の子供おしなべて。
教をとる文字と共にとそれあのら

しめんの御まで手の技にかゝる
有ばこれを守るべき。抑
学の道あるや人の智識を
おしひらき世の風俗を敦く
して家富昌えしを
起し一人前の人となる。

ためなり。あきらかに是非をも
手跡男女の差別なく。
伊呂波のもじより章句もみな
土地にての学校へ手を入まじ
足を運ばして照目しなり。
まづ学ぶべし。夫はさて措き

当國ハ。土地ハ前にもいふ
ごとく。其ひろくして武蔵野
とく。曠原平野おほく続きて廿
二郡の大國なり。北と東ハ
上野と下野下總に界し
て男をも残して流るゝ。世ふ

利根川の名も高く三大河の
中において坂東太郎と
字せり。其源ハ上野の
其餘の國より流れ来て
甘楽川乃下流なり次より
中川其次を。葛西太郎

の角田川。其上流を秩父川。
角田の川ハ當國の第一なる
類ひ好奇景富士と筑波
を東西に隔て互ひに
相照し。東風按ましく來
の日まて長堤一帯みな桜。

櫻花ハ空をうづみぬ。雪か雲か
とも三匝乃堤の上すて織なし
あり。群きたる遊ひの人絶ず。
夏ハ納涼あり。秋の夜月。
川風寒き冬の日もし。こふ
棹さして雪見船。四季節を

の眺望を。筆に記し
尽されず。南東に一面に。
武蔵の海に入海まで。日
本所大湊大船小船数
千万。蒸気帆前の西洋
形。船ありて其夕出て

行く光。京を四海の潮
みなこゝにつどひ来るかと
疑ふる。西の方を甲斐信
濃つゞきて秩父の山々
嶽三峰。武甲山。南を小佛
高尾山。甲斐の國より流

走来る。水も多摩川清
らなり。流れて末は六郷
の渡を過て海へ入る。扨も
東京に、食水を地面の
下に樋を埋めて。多摩
の流をひき来る。町々所々

の圖

横濱の圖

の渡を過て海へ入る抔も
東京は食水て地面の
市中樋を埋し多摩
の流を引き来る町々所々

ありさつとうや東京よりまで
路七里海岸づたひ南北
方神奈川宿の先づ東の横
濱港とて当今は貿易商
社の一大廓輸入輸出の数し
まことに富商大賈も軒を

並ぶ畫樓繡閣天を突く
市是一箇の不夜の蛛窠は
仙境に法心地せられ扶桑下ら
走く電車の濱をつたふて
金澤の文も得うしつき風景
の眺望重きまん寫帝しとて。

昔巨勢の金岡か筆を
捨しとも理なき生の
管轄せし一府三縣より
まとまれ東京府中の府廳に
あり。荏原と豊嶋の二郡。
夫より足立と葛飾の西

をあつく管轄し。西の郡
は十三で入間郡の川越なり。
入間縣の廳ありて。全く
之を支配せしむ。其文小の埼
玉郡。比企まで七足立葛飾は。
埼玉郡岩槻なり。埼玉縣

廳の支配なり。南四郡と隣
国せし。相模の國乃三郡の三
浦鎌倉高座とし合せて
支配する廳をかの横濱
の神奈川縣に支配を各なる
まで。武蔵一國を總計し。

二十二郡なり人口は一百六十
六万人余なり。中正土地肥て
田畠一体作物宜しき所なり。然ども
俗気きびしくて東秋
とりわけ風多し。其風俗は
気広く性質まことぶる活

達なり。物ごと屈せぬやうなる
事ども。都会の地なれば自ら
奢美より流れて華麗よ。
随る風ありなをのしまで惰
もへきの事一なる。其土産物
の大概は。浅草海苔小久我

索麺。岩槻木綿磨之染。
紫染や錦絵あり。髻結合
羽の烟草入。
郡十二と十三郡。安房と上
総の地を隣り。南は安房
平に上総二つ合せて広大

の海へさし出し岬ありて相
模武蔵と相対し武蔵
北海を西へ。東ははまて
なき太平海。南はともに
山多く。嶮岨の處所多けり
あれど。其界目に鋸山。花立

峠清水山。土地の氣候あたゝか武蔵地よりのもりしこゝもおなじことなれど人の氣質ハ偏屈なく安房なる人口十三万上總の國ハ一國にて三十六万四千余。其地方ハ五ヶ所の管

轄なり上總の國ハ木更津とて武蔵へ向ひし一港土地ハ廻船繁昌し木更津船路を立置ての安房なり良の子木綿苔。目黒鰹や上總ならハ太多喜

鯛あり鰒の地。二万石まりなあ
る産としられ。
其十四万石下総とて武蔵
とに纏り挿まりて。武蔵
の海は袋の底。小にて常陸小
地をも隣りて坂東太郎の地よせ

末と下野常陸なる山より。
流れて出る川こと共に集
まり堰とし界の沼へ海へ
入る地とし此あ一体より川
河の漂ふ沼より武蔵に
つゞき生なまりて。又平原にも

おほしと称ぬ沼の頗る大な
るもて印旛郡のいんば沼との
爰に佐倉とて下総西部
の九郡を管轄なせる縣
廳は是之を印旛の縣とい
ふ。又其東北三郡に隣せ

常陸は土浦の新治縣は
支配なり合せて國の人
口そ四十七万八千余風土風
俗みな等しく上總の國より
至れば其産物は蒟蒻
海苔結城紬に三度粟

十五常陸ハ一國にて東海
ゟのまへ也國西ハ山より東
海池沼川水充満し西ハ
隣の下野より流る川ハ
那珂川や北より来る久慈
川ハ其名も高き筑波

嶺の峯より落る水名野
川水戸の城下川水流れ来て
霞ヶ浦の末遠き鹿島のあけ
きし北京まで常陸乃
一勝地にて常陸の土浦の新治
郡の笠間を菊真の郡之よ

又下総ハ阿る三郡也。
筑波ハ列る山にして高さ
河内ハ佃仲して。北ハ金
砂ヶ嶌鈴山磐城の界にて
花園山にいたる五郡より都
那珂郡ハ水戸の茨城

縣其縣廳なり一國
中の人口数四十八万五千余
其風俗ハ只質朴に
して我意おほし其産
物ハ蒹和田鯉西の内紙
小松原なり。

瓜生氏日本國盡巻二終